



2026.5.17

五月十七日（日）、第二十二回目となる「Symphony of Peace Prayers (SOPP) 世界平和交響曲」宗教・宗派を超えて、共に世界の平和を祈る」が、「むすび」MUSUBI」をテーマとして七年ぶりに富士聖地で開催された。

SOPPは二〇〇五年五月の初回以来、平和を愛する人やそれぞれの信仰、信条を持つ人が一堂に会し、平和を創造してゆくために宗教・宗派、国、人種など、さまざまな違いを超えて心一つに祈る場として、過去二十年にわたって毎年開催されてきたグローバルな祈りの式典である。

過去二十年の歩みの中でSOPPは、平和に向けた意識改革の一つのムーブメントとして世界各国に賛同者を増やしつづ、二〇二〇年以降のコロナ禍の渦中においても形を変えながら毎年の開催が実現されてきた。

七年ぶりの現地開催となった今回のSOPPは、新たにテーマとして加わった「むすび」MUSUBI」や、これからのSOPPの展望について富士聖地に集った一人一人と改めて分かち合えた機会でもある。

今年のSOPPは、平和を愛する人々が時間と空間を共にしながら祈ることの尊さを再確認すると共に、長きにわたるSOPPのこれまでを総括し、次の二十年を共に築き、歩んでいこうという希望の溢れる場となった。

（文：大森雄貴）



五月十七日（日）当日、富士聖地は晴天に恵まれた。会場を見守るようにそびえる富士山の山肌は、初夏の陽光にくっきりと浮かび上がっている。時折、涼しい風が吹き抜けては、野外会場を環状に取り囲む世界各国の国旗を揺らしていた。会場には多くの参加者が詰めかけ、草原の上に思い思いに腰を下ろして開会の瞬間を待ちわびている。ある方はベンチに腰掛け、またある方はレジャーシートを広げている。熱中症対策も兼ねたテントには乳幼児や学童期の子どもたちとその父親、母親たちの姿も見えたほか、久しぶりの再会に話が弾んでいる方や、初めてのSOPP参加でスタッフに声をかけている方の姿も見られた。またこの日の行事の様子はオンラインで全世界同時配信されており、当日は白光真宏会副会長・西園寺里香氏による音声ガイドが行なわれていた。

そして、太陽が最も高くなる正午。SOPP2026は、由佳会長代理の開会宣言より始まった。

実に七年ぶりとなる富士聖地でのSOPP開催に涙されつつ、由佳会長代理はこれまでの、そしてこれからのSOPPについて日本の成長の哲学である「守破離」と重ねつつお話しされた。

「守」とは「型を守ること」。「破」とは「型を破ること」。「離」とは「型から離れること」。SOPPはこれまでの二十年間をかけて先人たちと共に型・土台を形づくり、二〇一三年に

は国連でのプログラム開催が実現された。その後、コロナ禍による現地開催中断を挟みつつも、SOPPは今日に至るまで、世界中の仲間と手を携えあいながら実施されてきた。そして今、SOPPはその型を破り、新しい発想や挑戦を加えていく「破」の入り口に立っているのではないかと、由佳会長代理は続けられた。それはこれまでの土台があつてこそ踏み出せる一歩であり、新たなエネルギーや空気、可能性を引き込む創造の時が来つつある、という視点である。では、その先にある「離」とはどういったものか？ 由佳会長代理曰く、それは「人類一人一人の自由な神聖（誰の中にもある尊い本質）そのもの。あるいは、神聖を表現する表現体としてのSOPP」であるという。

加えて、二〇二五年以降新たに加わった「むすび／MUSUBI」については、次のようにお話しされた。

「今、世界を見ると、本当にさまざまな混沌や未来に対する不安を多くの人々が持っています。富士聖地は、そしてSOPPは、祈りを通してみんなを一つにしていく。各宗教・宗派の平和の祈り、世界各国の平和の祈りを通して、大いなるものとなつたり（縦のむすび）、会場に座る皆様一人一人となつたり（横のむすび）、そして、さまざまなものとなつたり（動物や植物、自然や地球という生命）、そして何より、自分の本心と結ばれていく……そのような時間を築いていきたいとおっしゃいます」。



続いて、白光真宏会理事長・納谷智彦氏からの開会挨拶が行なわれた。納谷理事長はSOPPに関わるすべての方々、そして日頃より会の活動を支えてくださっている各界の皆様へ御礼申し上げ、SOPPという取り組みがどれだけ多くの人々と共にあり、実現されているかをお話しされた。

また、世界情勢が混迷を極める今日、SOPPが人々の神聖な精神を発揮し、平和で調和した世界をつくるモデルとなる時代を迎えつつあること、祈りには人類の意識を新たな時代へと導く力があることへの確信をさらに深めつつあるというお話の後、次のように語られた。

「本日、ご参加の皆様と共に、地球世界のすべての国と地域、そこに生きる人々、そして、大自然に向けて、尊い平和への祈りを捧げてまいります。それは、世界平和の一つの型となるに違いありません。本日の祈りが、世界を平和に導く、確かな力となることを確信するものであります」。

納谷理事長のご挨拶の後、白光真宏会会長・西園寺昌美氏により開会のご挨拶があった。

逐次通訳を務める由佳会長代理と共に壇上に登壇された昌美会長は、野外会場に集まった参加者の一人一人に目を配られながら、目に涙を浮かべられていた。これまで晴れの日も、雨の日も、嵐の日も、雪の日も一心に祈りを捧げてきた会員、そして祈りの同志の皆様が目に焼きついていると、その

胸の内を明かされ、当日参加していた皆様に心からの感謝を述べられた。

そして、人種や性別、国境線を超え、人類が一つになる時が今まさに来つつあるのだということ、白光真宏会創始者・五井昌久氏より会を引き継いで以来、皆様と共に何十年も「世界人類が平和でありますように」という祈りを積み重ねてきたからこそ今があるのだ、とお話された。

その後、本日のSOPPに関わるすべての方々への感謝を述べられた後、次のような言葉で開会の挨拶を締め括られた。

「今、私の心は喜びと幸せに満ち溢れております。皆様の愛に包まれ、ここまで来たことに心より感謝申し上げます。お一人お一人が大切な尊い方なのであります。これからもしよりしくお願い申し上げます」[詳細は8ページを参照]。

平和は一人一人の願いと祈り、そして、そこから生まれる行動や献身によって築かれていくもの。由佳会長代理、納谷理事長、昌美会長はそれぞれの視点からSOPPのこれまでの歩みや世界平和への意義、これ

かと思えば、心臓の鼓動にも聞こえ、参加者の中には和太鼓に共鳴し、心臓が大きく力強く打つのを感じた方も居たかもしれない。和太鼓の音色は振動となって野外会場を取り巻く木々や山々、風、大地に染み込んでいった。

原田氏による奉納演奏終了後、SOPPはメインプログラムへと進んだ。「各宗教・宗派の平和の祈り」と、「世界各国の平和の祈り」である。

「各宗教・宗派の平和の祈り」は、SOPPの精神の根幹である「宗教・宗派を超えて、共に世界の平和を祈る」ことを体现するプログラムである。今年は仏教、神道、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教、ヒンズー教、白光真宏会という七つの宗教・宗派の代表者がお一人ずつ壇上に登り、平和の祈りを奏上された後、参加者全員が誦する祈りの言葉をリードされた。七つの宗教・宗派の代表者が登壇される舞台の後方には、青色で海を、白色で陸地を表した大きな世界地図が掲示されており、登壇いただく



からについて語られただけではなく、この場が実現されていることへの感謝という温かなメッセージを式典の初めに分かち合われた。

開会の挨拶を経て祈りの時間に入る前に、和太鼓奏者である原田嘉子氏による和太鼓の奉納演奏が行なわれた。

ステージに向かって右手には檯台に設置された大太鼓が準備されており、由佳会長代理の進行によって原田氏が紹介されると、白装束を身に纏い、総髪にした原田氏が和太鼓の前に登場。原田氏は和太鼓に一礼した後、後に跪き、いざ、和太鼓の演奏が開始された。白装束の奏者は両足を開き、中腰の姿勢に。両手に握ったバチが振りかざされ、檯台を含め全高二メートルはあろうかという大太鼓へと振り下ろされる。ドドンという太く低い音が野外会場に響き渡り、空気を揺らす。二本のバチが和太鼓に打ち込まれるうち、会場に集った皆が和太鼓の奏でる原始的な音と振動に一体化していく。和太鼓の音色はさざなみや急流、地響きに似た

方々は富士聖地から全世界へと祈りを送り届けるといふ神聖な精神で場に臨み、会場の参加者、そしてオンラインの参加者に向き合われていた。

「世界各国の平和の祈り」は、アジア、アフリカ、ヨーロッパ、北アメリカ、南アメリカ、オセアニアに存在する百九十三カ国とその他のすべての地域に向け、参加者全員で平和を祈るプログラムである。今回のSOPPでは世界各国の名前が英語で司会によって読み上げられ、その後、参加者全員で「May Peace be in [Country Name (国名)]」を唱える形式で進行された。また、各国の名前を読み上げ、その国の平和を祈る際は、その国の国旗を掲げた旗手が宗教リーダーの壇上の一段下に歩を進め、一国一国への意識を会場全体に促した。

なお、これまでのSOPPにおいて、「各宗教・宗派の平和の祈り」と「世界各国の平和の祈り」は別のプログラムとして行なわれてきたものである。

しかし、会の進行を務められた由佳会長代理は、今回のSOPPにおいてはこれら

2つのプログラムの構成を変更していく旨をアナウンスされ、当日は各宗教・宗派のリーダーお一人に登壇と祈りの時間を設けた後、アルファベット順に二十八カ国ずつ「世界各国の平和への祈り」を取り入れ、二つのプログラムを織り重ね、融合させていく、という形式で進行された。

会場の参加者は来場時に配布されるブックレットを手元に準備し、順番にページをめくって、各宗教・宗派の祈り及び世界各国の平和の祈りを唱和していった。

各宗教・宗派のリーダーとして初めに登壇されたのは、仏教の野原眞承氏（曹洞宗 海藏山 龍雲寺 住職）である。野原氏はこれまで二〇二〇年、二〇二五年にオンラインで開催されたSOPPに登壇してくださったが、今回初めて富士聖地での祈りのリーダーを務めていただく運びとなった。当日は参加者と共に摩訶般若波羅蜜多心経を唱え、その後、野原氏の「私はただの号令係ですので、皆様お一人お一人が宇宙の中心に立ってお祈りしていただくようにお唱えください」というお声かけに続いて、般若心経真言、普回向を参加者全員で唱えた。

続く世界各国の祈りの時間では、アルファベット順に従い、A及びBから始まる名前の国二十八カ国に向けて平和への祈りが捧げられた。

二番目に登壇されたのは、神道の土橋政彦氏（人穴浅間神社宮司）である。白い浄衣姿で登壇された土橋氏はこれまで二〇一九年、二〇二一年のSOPPにご登壇くださったっており、今回は富士聖地にほど近い人穴浅間神社よりお越しいただいた。土橋氏はまず富士山に向かって拝礼され、会場の参加者にご挨拶された。そしてSOPPのためにご準備いただいた祝詞を奏上された後、「祓ひ給へ 清め給へ 守り給へ 幸ひ給へ」の詞を会場全員で三度繰り返し唱え、平和を祈る時間が設けられた。

続く世界各国の祈りの時間では、アルファベット順のC、D、Eから始まる名前の国28カ国に向けて平和への祈りが捧げられた。

三番目に登壇された宗教リーダーは、ユダヤ教のマーク・N・ザイオン氏である。ザイオン氏はこれまで二〇一六年、二〇一八、二〇二一年、二〇二四年と、富士聖地及びオンラインで開催された過去六回のSOPPにご登壇くださったっており、白光真宏会としても縁の深い方である。当日はユダヤ教指導者であるラビ・メナヘム・メンデル氏による言葉、申命記の言葉を英語、ヘブライ語で捧げられた後、全員で祈りの唱和を行なう時間が設けられた。

続く世界各国の祈りの時間では、アルファベット順のE、F、G、H、I、Jから始まる名前の国二十八カ国に向けて平和への祈りが捧げられた。

四番目に登壇されたのは、キリスト教カトリックのフラ



ンシスコ・エスカランテ・モリーナ大司教閣下「ローマ教皇庁（バチカン市国）駐日大使」である。国際的にも重要な職責を担われている大司教閣下は今回、初めてSOPPにご出演くださった。当日はマタイによる福音書第五章四十五節、ルカによる福音書三十一節を参照した祈りの言葉を奏上された後、参加者全員で神の愛による平和と調和を世界にもたすための言葉を唱和した。

続く世界各国の祈りの時間では、アルファベット順のJ、K、L、Mから始まる名前の国二十八カ国に向けて平和への祈りが捧げられた。

五番目に登壇されたのは、イスラム教のアイジャズ・アフマド・ダル氏と、サヒバ・イクバル女史（ロンドン、ローハンプトン大学イスラム教チャブレンチーム）。今回が初来日のお二

人にとって、SOPPの登壇や富士聖地への来訪も今回が初となる。お二人からはクルアーンに記されたアッラーの言葉と、平和の挨拶（提示）、平和への感謝（教え）、平和への導き（伝道）の三点を奏上された後、全員で一フレーズを三回唱える時間が設けられた。

続く世界各国の祈りの時間では、アルファベット順のM、N、O、P、Qから始まる名前の国二十八カ国に対して平和への祈りが捧げられた。

六番目に登壇されたのは、ヒンズー教のクリシュナン・ウニクリシュナン氏「サナータナ・ダルマ（永遠の法）」に仕える物語の「紡ぎ手」である。ウニクリシュナン氏もまた、今回SOPPに初めて出演いただくにあたり、富士聖地にも初めてお越しくださいました。氏は参加者に祈りの初めと終わりに聖音「オーム」や「シャンティ」を唱和することを促し、さながら参加者とハーモニーを奏でるように平和への祈りの時間をリードされた。

続く世界各国の祈りの時間では、アルフ

を会場全体で唱和し、会場は温かな拍手に包まれた。

「各宗教・宗派の平和の祈り」及び「世界各国の平和の祈り」の締めくくりに、再び和太鼓奏者・原田氏が登場。

今、富士聖地には国境を越え、互いの信仰・教義の違いを超え、一体となって響かせた七つの宗教・宗派の祈りと、全世界百九十三カ国とその他のすべての地域へ向けた平和への願いが響き渡っている。それらを力強く、遍く世界へ、そして天へ、宇宙へ届けよと後押しするように、和太鼓が奏でられていく。ひびきは聖地の敷地を越えて反響し、あらゆるものとの距離をなくし、境界を消失させ、私たち一人一人の中に直接、体感をもってエネルギーを伝える。さながら、さまざまな信仰・言語によって実現される祈りの力や本質を表現するかのよう。会場、そしてオンラインに集った全参加者の思いや願いをその背中で受け止めながら、白衣の和太鼓奏者は終幕へ向けて打ち込みを加速させていく。演奏の最中の



アベット順のR、Sから始まる名前の国二十八カ国に向けて平和への祈りが捧げられた。

各宗教・宗派リーダー最後の登壇者として、七番目に登壇されたのは白光真宏会長・西園寺昌美氏である。昌美会長は神聖復活の印に関する一篇の詩を朗誦し、参加者一人一人の中にある神聖を心静かに感じる時間が設けられた。その後、ステージに登壇された会長代理・西園寺由佳氏、副会長・西園寺里香氏のガイドによって神聖復活の印が生まれ、「世界人類が平和でありますように」を日本語で三回、会場にいる参加者全員で唱和した。

続く世界各国の祈りの時間では、アルファベット順のT、U、V、Y、Zから始まる名前の国二十五カ国及び、その他のすべての地域に向けて平和への祈りが捧げられた。その他のすべての国と地域を表わす旗として、また、地球全体を表わす旗として青地に地球が浮かぶアースフラッグを旗手が掲げている。

最後に「May Peace Prevail On Earth」

鬼気迫る気合の発声が風を切り、演奏を聞く私たちは今この場・この瞬間にいることが改めて自覚された。演奏が終了すると、自然と大きな拍手が巻き起こり、野外会場を満たした後、この拍手もまた蒼穹へ響き、染み渡っていった。

原田氏の演奏後、由佳会長代理の進行により、しばし静寂の時間が設けられた。心静かにここまでの時間を振り返り、反響させ、一人一人の内面に息づく世界人類の平和への願い、思い、つながりに意識を向ける時間である。

「ここまでの皆様の宗教のお祈り、各国へのお祈りが今、この和太鼓のひびきのようにしっかりと、必要な大地、必要な人々、必要な場所へと、送り届けられていくことを意識してまいりたいと思います。そして、私たち一人一人の奥深くに響く、その大いなるひびきと、世界が結ばれていることを感じていただきたいと思います」。

数分間の静寂の時間の後、西園寺真妃副会長の進行により、各宗教・宗派のリーダ

の皆様お一人お一人から最後にお話を頂く時間が設けられた。ステージ上には仏教、神道、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教、ヒンズー教を代表する七名のリーダーと、和太鼓演奏者の原田氏が並ばれた。

ヒンズー教の祈りをリードしてくださいとウニクリシユナン氏は本日の感謝を述べられた後、分断ではなく包摂、統合をめざすSOPPという場について語られた。

「私は以前、伝統は時に分断や排除のための力として利用される、ということを考えていましたが、ここでは違いました。ここでは伝統が、人々を包み込み、誰をも歓迎するものとして尊ばれています。そして、さまざまな伝統を通して、私たちが調和と多様性の中で共に集うことが出来ているのです。これからの世界においても、私たちがこの実践を共に続けていきますように。それが私の願いです」。

神道の祈りをリードしてくださいと土橋氏からは今回、初めてじっくり見て回った富士聖地の場の力や、この場で開催されるSOPPの意義についてのお話があった。

「昨日、初めて富士聖地全体を見学させていただきました。聖地内を四千歩ほど歩き、その敷地面積は十萬坪（約三十三万平方メートル）と伺ったのですが、聖地の素晴らしさ、雄大さを感じました。日本一の富士の麓である開かれたこの地に人々が集い、祈りを捧げること、この大会が開かれることを大変喜ばしく思います。今後ともどうぞよろしくお願いいたします」。

仏教の祈りをリードしてくださいと野原氏は本日、氏が住職を務める龍雲寺においてもSOPPの最中、平和の鐘を鳴らしているというお話の後、和太鼓奏者・原田氏とされたお話についてご紹介された。

「今朝、和太鼓奏者の原田さんとお話したのですが、和太鼓の音色はシンプルであるが故に嘘がつかない、誤魔化しが効かない、人格や人間性が音に現われると伺いました。私たち一人一人の平和の祈りのひびきもそうしたもののひとつだと、感動した次第です。これからも皆様と一緒に祈りの道を歩ませていただきたいと思います」。

ユダヤ教の祈りをリードしてくださいとザイオン氏は、今回の式典開催に向けて準備を進めてきた一人一人に感謝を表しつつ、あるユダヤ教指導者（ラビ）の語った逸話に絡めてSOPPとはどういった場なのか、についてお話してくださいました。

「こんな逸話があります。小麦が汚染され、食べれば正気を一時的に失ってしまうという状況において人々はどうしたらよいのか？ 尋ねられた王は語りました。『汚染された小麦を食べよう。そして額に印をつけるのだ。そうすれば私たちは互いを見つめ合った時、真の姿に気づくことが出来る』。私にとってSOPPはまさにその印のような存在です。私たちは日常の中で真のアイデンティティを見失いがちですが、ここで共に祈る仲間と出会うことで、自分たちが本来どのような存在であるかを思い出すことが出来るのです。私はそのことに深い感謝を抱いております」。



イスラム教の祈りをリードしてくださったイクバル女史は、今回の初来日、初登壇につながった真紀副会長とのご縁や、平和を願う同志との邂逅への感謝も現わされつつ、容易に分断が生まれる今日の世界で互いを知り合うことの重要性について、次のようなお話を紹介された。

「現代は分断が生まれやすい時代ですが、人間には違いよりも共通点のほうがはるかに多くあります。私が大学で学生たちにいつも伝えているのは互いを知ることの大切さです。それはABCのようにシンプルです。AはAsk（問いかける）、BはBuild Bridges（橋を架ける）、CはCelebrate Differences（違いを尊重し祝福する）です。この実践を重ねることで、私たちはより深く理解し合うことが出来ます。平和を実現する責任は、私たち一人一人にあります。祈りを通して互いを知り、愛し、思いやることで、人類は必ず一つになれると私は信じています」。

同じく、イスラム教の祈りをイクバル女史と共にリードしてくださったダル氏は、初来日に際して感じた日本の人々のあり方について、次のように表現されていた。

「アッラーに心から感謝するとともに、私たちを日本に招待してくださった皆様にも感謝申し上げます。これが私たちにとって初めての来日となりますが、日本の皆様は本当に親切で、思いやりが深く、そして謙虚でいらっしやいます。日本の人々は平和のチャンピオン……平和の擁護者であり、推

進者であり、やがては平和そのものとなるでしょう」。

キリスト教カトリックの祈りをリードしてくださったフランシスコ・エスカレンテ・モリーナ大司教閣下からは、祈りを絶やさず、継続していく重要性についてお話があった。

「私はこれまで長崎や広島をはじめ日本各地で平和を祈る式典に参加してまいりましたが、ここでは平和が真の国際的な価値として感じられます。平和は、単なる理念ではないのです。私たち自身が心の中に築き、家庭や地域社会の中で育んでいかなければならない具体的なものであります。平和は人類共通の使命であり、すべての人にとって最も重要な普遍的価値の一つです。どうかこの祈りを絶やさず、続けていただきたく思います」。

和太鼓奏者・原田氏は今回のご縁につながった野原氏をはじめとする方々への感謝、そして、この瞬間この場所で祈りを共に出来る奇跡に感謝を表現されつつ、和太鼓の音色について語られた。

「和太鼓の音は、お母さんのお腹の中で聞いていた音に近いと言われています。皆さんの脈打つ鼓動と響き合い、一緒にできたことを本当に有り難く思っています。どうか世界が、生きとし生けるものが、すべてのものが平和でありますようにと、心からお祈りします。本日は有難うございました」。

各宗教・宗派のリーダーの皆様、そして和太鼓奏者・原田氏に惜しみない拍手が送られ、その後、由佳会長代理がステ

ージへ登壇し、閉会の挨拶が行なわれた。

由佳会長代理は七年ぶりの開催となった富士聖地でのSOPPの終幕に際し、溢れ出す涙を拭われながら、開催に関わるすべての皆様、参加いただいたすべての皆様への感謝を述べられた。そして、一日を通して改めて感じられたSOPPの意義について、次のように語られた。

「SOPPには、深い知が溢れています。深い知とは、祈りです。歌です。ひびきです。共鳴です。場のエネルギーです。周波数です。それを、二十年間守りつづけてくださった方がいるからこそ、これから私はこの深い知を、次の時代を生きる世代と、次の平和な世界を創り上げていく未来に、ちゃんと託していきたいという思いに溢れるばかりです」。

SOPPの過去二十年間の歩みは、決して平坦なものではなかった。また、直近の二〇二〇年から二〇二五年までの間はコロナ禍によって富士聖地での開催は叶わず、ある種の断絶を経験している。オンライン開催という形式を採用し、全世界同時配信



という新たな可能性が開かれたものの、七年の歳月を経ての聖地での開催は、SOPPそのものにも大きな変化を及ぼした。会場に足を運ぶ人々や世代の変化、会場に準備されるベンチの増加、世界各国の国旗を掲げて行進する旗手の不足……そうした現実的な変化があった。

一方で、そうした現実的な変化に直面した時、これからの新たな富士聖地のあり方が現われてきたと、由佳会長代理は振り返られている。初めて有志の旗手を募り、それによって今までとほぼ変わらない体制でプログラムの進行が可能となった。初めてキッチンカーや事前の富士聖地見学ツアーが企画され、初めて訪れる方にとっても親しみやすい環境づくりの試みが生まれた。現実的な変化は確かに起きているが、それは新しい可能性であり、次の世代と共に創り上げていく、成長・発展の兆しである。

より多くの方々が、先人たちの積み上げてきた深い知を体感し、私たちは一つであるということを実感し、一人一人の中に響

く本心を表現できる場所として、これからも皆様と共にSOPPを守り、発展させ、開いていきたい。

このようなメッセージと共に、由佳会長代理の閉会の挨拶は締め括られた。

会場内に温かな拍手が鳴り響く中、SOPPはいよいよフィナーレに向かう。世界各国の平和を願い、軽快な音楽と共に一人一人の旗手が各国の国旗を掲げ、ステージ後方より登場。ステージ中央から野外会場へ扇状に広がるように、四列に分かれた旗手たちが会場内を行進していく。午後の日差しに照らされる野外会場に、色とりどりの国旗がはためき、すべての国と地域が調和している様が浮かび上がった。

各国の国旗を掲げた旗手たちが会場へ歩を進め、最後にステージ上に登場したのは、地球が描かれたアースフラッグを掲げた旗手である。旗の竿頭を会場中心に向けた後、大きく静かに左右に旗竿を揺らす。会場内に四列に分かれ、ステージへ向き直った各国旗の旗手たちもまた、ステージ上の旗手の指揮に共鳴するように旗竿を揺らした。そして、会場参加者の拍手を受け止めつつ、荘大な音楽のクライマックスに全旗手が空高く旗を掲げ、SOPPはフィナーレを迎えた。

